



菜の花

発行 独立行政法人国立病院機構 指宿医療センター
〒891-0498 鹿児島県指宿市十二町 4145 番地
TEL 0993-22-2231 (代表)
0993-22-2230 (ダイヤルイン)
URL <http://www.hosp.go.jp/~ibusuki/>
印刷 陽文社印刷株式会社

NHO IBUSUKI MEDICAL CENTER

平成 27 年 12 月

新病棟について

院長 田中 康博

平成 19 年から様々な改革を行い、確実に「役に立つ病院」になって来たと思います。ただ、建物については 40 年以上経過し、療養型の構造になっているため急性期病院としては、いろいろな不都合が有りました。もっと機能的な病院を目指し、建て替えを計画しておりました。平成 26 年 5 月、本部から許可が下り、平成 27 年旧看護学校校舎を解体、いよいよ新病棟(救急外来、手術室、透析室、分娩室)建設が始まります。手続等が長くやきもきしておりましたが、平成 29 年度 4 月からは新病棟運用の予定となっています。現実味が増すとワクワクするものです。

「病院病床の機能分化と地域連携」、さらに「地域医療構想(地域ビジョン)」と言う事が最近言われています。急性期病院、慢性期病院をきっちりと分け、多彩な医療需要に対し機能性を高め、効率(医療サービス)を上げようと言う政策です。一つの病院で急性期から慢性期まで観てもらいたいという患者さんの気持ちも分かりますが、より機能的に確かな医療を提供するためにはこのような形を取らざるを得ないのかもしれませんが。住民の皆様のご理解も必要です。教育現場で例えると低学年では一つの教室ですべての教科を学習しますが、高学年になると各専門教室に生徒が行き授業を受けるようなイメージです。指宿医療センターの役割は地域救急医療、高度医療、急性期入院治療それに小児科、産婦人科など成育医療などです。地域医療の中核として、他の医療施設と協力しながら皆様の健康を守りたいと思っています。

鹿児島県のどの地域も人口減少の歯止めが効かず、過疎化へ向かっています。指宿も同様ですが、減少率は他の地域より小さいようです。もし医療から介護まで質の高いシステムが構築でき、健康の保障ができれば、指宿に転居しようと思われる方も増えると思っています。町おこしの一翼を担うかもしれません。

今回の建替えには外来は対象になっておらず、手狭ですが、もう少しこのまま使用しなくてはなりません。外来建替えも早急に行いたいと思っていますが、皆様の要望の声が大きくなればなるほど、本部から許可が出ると思っています。広くて(約2倍)きれいな一般病棟、産科、小児科病棟になれば、もっと安心して出産や子育てが可能になりますし、良い環境で我々と一緒に病気と闘う事もできると思っています。今後とも指宿医療センターをよろしく願っています。いつの日か「指宿には良い病院が有る」と言われるよう頑張っていくと思っています。



理念

患者さまにやさしく、地域に信頼される
良質な医療の提供をめざします。

運営方針

- 1 がん診療の治療の向上をめざします。
- 2 成育医療の充実をめざします。
- 3 救急医療の充実をめざします。
- 4 脳血管障害の治療の向上をめざします。
- 5 地域医療機関との連携を図り、説明と同意に基づいた安全で質の高い医療をめざします。



当院のロゴマークは、指宿市が誇る「菜の花」をモチーフにしています。

たくさんの黄色い円は花の部分を表しており、菜の花は小さな花が集まって1つの花を形成しているというように、病院のスタッフ1人ひとりが集まって、病院という組織があるのだということ表現しています。

緑の弧は菜の花の葉と、病院(花の部分)には新しい風が常に舞い込み、また病院が地域に新しい風を送り出しているという「風」のイメージを示しています。

病棟等建替整備に伴う準備工事が無事に終了したことについて

業務班長 北江 勇

新病棟等の建替場所の地域医療研修センター建物（平成14年4月1日に閉校となった附属看護学校）の取り壊し等の整備（準備工事）は9月30日に関係する皆様のご協力により無事に終了することができましたことをお知らせします。地域医療研修センターも旧看護学生寮食堂を改修して運用を開始しております。

本体工事については、本部の設計承認が更に遅れ5ヶ月遅れで進行している状況ですので、工期の変更を余儀なくされているところですが、本部とのやりとりを迅速に行い整備した場所に早く新しい病棟等の建替が完成するように努力して行きます。



解体工事中



新病棟工事を待つ建設予定地

指宿 菜の花通信

No.75

総合内科医師 中村一彦

田舎医者 の流儀 (47)・・・貧しい大統領

世界で最も貧しい大統領と言われるウルグアイ大統領ホセ・ムヒカは言う。「午後からずっと話されていたことは、持続可能な発展と世界の貧困をなくすことでした。けれども、私たちの本音は何なのでしょう。現在の裕福な国々の発展と消費モデルを真似することなのでしょうか」

「ドイツ人が一世帯で持つ車と同じ数の車をインド人が持てば、この惑星はどうなるのでしょうか。息をするための酸素がどれくらい残るのでしょうか。西洋の富裕社会が持つ傲慢な消費を、世界70億～80億の人ができると思いますか。そんな原料がこの地球にあるのでしょうか。可能ですか。なぜ私たちはこのような社会を作ってしまったのですか。マーケット経済の子供、資本主義の子供たち、つまり私たちが、間違いなくこの無限の消費と発展を求める社会を作ってきたのです」

2012年6月20日から3日間、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで国連の「持続可能な開発会議 (Rio+20)」(以下リオ会議)が開催された。188カ国および3オブザーバーから、首脳と閣僚級を含む97名の他、各国政府関係者や国会議員など約3万人が参加し、自然と調和した人間社会の発展や貧困問題が話し合われた。この会議の最後に登壇したホセ・ムヒカ、ウルグアイ大統領の演説である。(世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉、佐藤美由紀著、双葉社)

この演説はネットなどで世界中に発信され、衝撃を与えた。ホセ・ムヒカ大統領はただ口先でそう言ったわけではない。彼の生活は農場に住み、ぼろ車に乗り、大統領の給与9割は寄付をしている。自らの資産は少なく、お手伝いさんも置かず、自らが料理し、生活が自立している。そして、彼は世界で最も貧しい大統領と言われた。しかし、彼は言う「貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」。

日本では良寛、松尾芭蕉、吉田兼好、橘曙覧など多くの先達が自然と調和し、清貧な生活、生き方をした。慥貪を良しとしない生き方が日本人の源流となっている。日本から言うと地球の裏側にあるウルグアイの大統領がそのような生活をし、考え方を発信するとは驚きである。我々は現代日本のリーダーにそのような人を選んでこなかったことを残念に思う。

今年、読んだ本の中で、ホセ・ムヒカの事、考え方を書いた本と抗生物質は正常細菌も殺す、その意味を問うた「失われてゆく、我々の内なる細菌 マーチン・J・ブレイザー著 みすず書房)には感銘を受けた。

